

シリーズ “放射線と向き合っ” [第2回 序]

本シリーズでは、平成23年に起きた東京電力(株)福島第一原子力発電所事故以降、専門家ではない様々な立場の方々がどのように放射線と向き合ってきたかを紹介している。

2回目の今回は、自治体職員として地域の除染に取り組んで来られた福島県伊達市役所の半澤隆宏氏に登場していただく。伊達市は福島第一原発から北西に約60 km離れた位置にあり飯舘村と境を接している。汚染状況重点調査地域に指定されている同市では、事故の起きた年から目標を定めた除染を行っており、その先頭に立ってきたのが半澤氏である。また、伊達市では小国地区などにある局所的に放射線量の高い128世帯が、平成23年に特定避難勧奨地点に指定された。翌年12月14日に解除されたものの、指定世帯以外からの自主避難者も含め現在も1,000人を超える方々が自宅から離れて生活している。国の方針と住民の暮らしをつなぐ要となるのが自治体の役割であり、その荷は重いことと察する。なかでも、直接住民と接する機会の多い現場の方々にはそこに立つ者にしか分からない意見、疑問、悩みがあるであろうし、その思いは、事故から2年以上経過してどのように変わってきたのだろう。

放射線と向き合うことはいずれかの時点で直接的若しくは間接的に住民と向き合うことになるのではなかろうか。科学と現場とにはギャップがあり、様々な誤解や軋轢を生じる原因ともなってきた。そのギャップを埋める努力は双方で行わねばならない。住民からの批判を恐れて被災地から専門家の足が遠のくようなことはあってはならない。私たち専門家もまたそれぞれ放射線との向き合い方を問われている。

(東北大学大学院 吉田浩子)

第2回 放射線と向き合うことは住民と向き合うこと

半澤 隆宏

除染するのはいつなんですか!?

「いつやるの?」「今でしょう!」が、流行っているようです。今が旬! という前向き感があって、受け入れられているのでしょうか。良いことです。

ただ、今「除染するのはいつ?」と聞かれれば、「2年前だったんじゃないですか。」という

気の利かない返答しかない。最近も、除染の迅速化が言われるようだが、残念ながら、除染の適正な時期は「今じゃない!」と言わざるを得ない。

東日本大震災、そして福島第一原子力発電所事故から2年半。“除染”に取り組むようになって2年2か月が経った。伊達市の対応が早か

ったのは、市長のリーダーシップと、早い段階で市が市民と向き合ったからだと思う。当時こそ「今でしょう！」の精神で除染に立ち向かっていたのである。

2年前、放射線は未知の不安だった

「東電の責任はどうなっているんだ！」「国が来て除染しろ！」「汚染土なんか東電の敷地に持っていけ！」2011年7月、除染の説明会には不満を吐き出す場となっていた。健康影響リスクの軽減のための除染が必要なこと、除染の効果について、仮置き場について……話したいことはあるのだけれど、なかなかそこにはいけない。

へこたれずに説明会を続けたが、なかなか糸口が見付からない。除染への理解はある程度進んだものの、仮置き場に対するかたくなな抵抗は想像をはるかに超えていた。科学的に説明すれば……と説明会で住民と向き合ったが、「なぜ、被害者の俺たちの土地に置くんだ！」「集めたら線量が高くなる。そんな危険なもの造らせられるか！」「いつまで置く気なんだ！はっきり言え。」20回、30回……何の収穫もなく、市役所に戻る夜が続いた。科学や理論がメンタルの前になすすべがない現実が、暗闇のように広がっていた。

2か月が経ち、さすがにへこたれかけたころ、「俺の土地、仮置き場に使っていいよ。」という声が掛かった。「本当!?!」たった10世帯の小さな集落だったが、ここから伊達市の除染が本格的に動き出した。

誰もやったことのない生活圏の除染は、手探りの連続であった。まず問題だったのは、空間線量率をどこまで下げられるか。当時の空間線量率は3.0~3.5 $\mu\text{Sv/h}$ 程度と高く、7月に行った実証試験などの結果からも、1.0にするのは厳しいと感じていた。廃棄土壌の量なども考慮

し、1.5にしようかと考えていたとき、住民から詰問された。当然ながら、線量がどのくらい下がるのかは、住んでいる住民にとっては、最大・唯一の関心事であった。1.5という数字では納得ができないと嘯み付かれた。検討の結果、ハードルが高いとは思ったが、1.0を目標値とし、業者にも指示した。

実際に除染をしてみると、やはり1.0にならない場所もあった。「あっちはなっているのに、なぜこっちはならないのか。」1.0になっても「もっと広く、あっちも除染しろ！」「この木も切れ！」我々が向き合っていたのは、放射線だけではなく、住民であった。

一方、住民は放射線の漠たる不安と向き合っていた。早く線量を下げなければ外部被ばくは減らない、農地を除染しないと米も野菜も食べられない、子や孫たちへの影響はどうなんだろう……などなど。2年前には、その切迫感が人々を動かしていた。仮置き場についても、様々な反対はあったものの、造らないと除染が進まないという共通認識があったからこそ、苦渋の決断をしてきたのである。様々な考え、思いで放射線と向き合っていた2011年の秋、良くも悪くも、そこに住んでいる住民を抜きには考えられなかった。

え、除染後の目標線量がない!?

あの秋から1年半、原発事故から2年。NHK福島局が県内の除染を特集した放送に驚かされた。直轄地以外の汚染状況重点調査地域の県内32の市町村のうち28市町村は除染後の目標線量を定めていない、というのだ。

取材記者は「厳密に目標を定めるより、まずは早く除染作業を進めることが優先されたため、目標の設定がされなかったのだと思う。」との分析をしていた。環境省の専門官も「前例がない初めての経験なので（目標の数値を）示

すのは難しいのだろう。」と発言。

「そんなはずはない！」私は、すぐにNHKに、ことの真偽を確認した。一昨年から、仕様書に目標を書き込んで除染をしている伊達市にあっては、信じられないことだったからである。何かの間違いか、質問の趣旨の取り違えではないか……、そんな思いがぬぐえなかった。しかし、取材をしてきたNHKの記者の答えは明確であった。「再確認しましたが、4市町以外は定めていない、という回答です。」「……」

一昨年の秋、除染後の目標設定に悩んでいた我々は何だったのか！ その経験、経緯があり、目標を明示しない除染など考えられなかった。いかに早く作業（除染）を進めたい、前例がない初めての経験だ、とは言っても、目標を示さず除染を始めるなど「ありえない」ことのはずだった。

2年が経過し変わったもの

「ほかの市町村は、なぜ除染の目標線量を決めないんだろう……」と思っていたある日、Bエリアの我が家にも除染が入ることとなった。ここ2年間で線量がかなり下がっているため、私が「もう、庭なんか削るような場所ないなー。」と言うと、85歳になる母が「あら、どうせやってくれるんだから、全部やってもらったら。」と言った。

「あ、そうか！」この時、こうした市町村に除染後の目標線量がない理由が分かったのである。

今、除染の目的は線量を下げることではなく、除染そのものになっているのである。放射線に対して何の知識もなかった住民も、ここ2年間で一定程度の知識を積み上げた。2年前に比べて、線量が半減したことも知っている。2年前の放射線への不安は薄れ、多くの人々が今の線量を冷静に受け止めている。一部の高線量避

難地域を除く市町村の空間線量率は、ほとんどが1.0 $\mu\text{Sv/h}$ を切っている。それどころか、0.5~0.3程度のところも少なくない。

発災後、先を争ってモニタリングをした住民も、今は促してもモニタリングをしようもしない。メディアに聞かれれば、「線量は高い。」「不安だ。」と答える人もいるものの、多くは今の線量を高いとは思っておらず、除染でどれだけ線量を下げることの目標を必要としていない。住民が「やってくれるなら、やってもらおう。」というくらいの意識なのだから……市町村が「除染の目標は定めていない。」「目標の設定は難しい。」などと平気で答えるのも道理ではある。

2年前の伊達市のように、除染後の線量を住民へ説明できるかどうか、真剣に悩んでいる市町村はない。今、多くの市町村の除染は、するのかもしれないかの、オセロゲームになりつつある。そこには、放射線をどう下げるか、除染とは何のためなのか、健康影響リスクの低減とはどういうことかの議論はない。

放射線量の高さ、それによる健康影響への不安が問題であった2年前の除染においては、線量こそが問題であった。住民のピリピリとした放射線に対する感覚は、除染の目的が健康影響リスクを低減するという、そのものであった。しかし今、線量は問題ではない。ここに、今の除染の問題点がある。

放射線と向き合っているか

最近、ほかの市町村に“除染をする基準”について聞いてみた。すると、判を押したように「0.23 $\mu\text{Sv/h}$ 以上は同じ仕様で面的に除染する。」との答え。除染の仕様を、線量に応じてエリアをABCと分けて取り組んでいる伊達市には、とても考えられないことだ。

伊達市では、市民全員に積算線量計（ガラス

バッジ)を配布し、個人の外部被ばくの実効線量の把握に努めている。まだ1年間の実測値は集計できていないが、これまでの9か月の実績からは0.5~0.3 $\mu\text{Sv/h}$ の空間線量率なら、年間積算1ミリにはならないようだ。ならば……0.23 $\mu\text{Sv/h}$ 以上を一律に除染する必要はないし、除染後の目標線量も空間線量率に応じて決められる。だからABCのエリア区分をし、線量に応じた除染が適切だ。放射線と向き合えば当然のこと……そう伊達市では考えている。

では、ほかの市町村ではどう考えているのか。「ほかの市町村がやっているから。」「0.23以上は交付金が出るから。」「住民が要求するから。」これでは、何の考えもなく一律な除染……いや、除染に似た作業をするだけである。

除染について市町村は、「国の対応は問題だ。」「ガイドラインは不適切。」「除染の手法に口出しし過ぎる。」などと言っておきながら、国が決めた? 0.23基準は丸呑みとは、どうしたものだろう。

0.23の空間線量率を年間積算1ミリと決め付けたり、年間積算1ミリが“しきい値”と考えていたり、交付金をあてに除染をしようとしたり……、除染する基準も、除染後の線量目標も自らは決めない、これでは放射線に向き合っているとは言えない。

仮に、国が「平成26年度から交付金の基準を0.43以上にする。」と言ったり、年間積算1ミリが、空間線量率0.43になったりしたら、どうするつもりなのか。交付金がなくても、0.23以上を一律除染するという考えを堅持するのか、あっさり0.43以上を除染の基準にするのか。市町村の、放射線との向き合い方が問われそうだ。

実は、向き合っていないのでは……

“0.23 $\mu\text{Sv/h}$ ”“年間積算1ミリ”は、除染の

定番数字になっている。実は、こうした数字が、むしろ人々が放射線と向き合うことの妨げになっているように思う。

福島避難区域の住民からは「除染で全域が0.23以下にならなければ帰還しない。」というような話も聞く。もちろん、放射線量は低い方がいいのだが、空間線量率が0.23 $\mu\text{Sv/h}$ なら実効積算線量が年間1ミリと決まっているわけではない。かなり高線量な地域を除染で一気に0.23にできるはずもない。大量になるであろう除去土壌の処分も簡単ではない。放射線だけが健康リスクではなく、避難による精神的なリスクも大きいと言われているのに……。

また、外で子どもを遊ばせないのも、線量を気にしてではなくなっている。“屋内”というだけで、わざわざ線量が低いところから高い線量の場所に来たりさえる。買い物なども、きちんと放射性物質の測定をしている福島県産ではなく、測定をしていなくても福島県産以外のものを買う。

これらからは、放射線と行動が密接に結びついているとは感じられない。既にイメージや風評に流されているだけでしかないように思う。福島県外に住んでいる方々も、福島県の放射線を正しく理解しているのではなく、何となく放射線が高いんだろうなー、というイメージしかないように思う。

そうした中で、0.23, 1ミリ, という数値にだけこだわり続けることは、放射線に向き合っていると言えるのだろうか。放射線のみならず、何かに向き合うこととは、その本質を見極め、その良さも悪さも知った上で、今どう対処するかである。単純に全受容、全否定することは、向き合うことではないように思う。

今、放射線と向き合わずに除染に取り組んでいる市町村だけでなく、いまだに“除染の迅速化”を唱える専門家やメディアもまた、発災当

主任者 コーナー

事の感覚から抜け出せずに、今の放射線の実態に向き合っていないのではないか……、いやむしろ目を背けてはいないか。

2年が経ち、線量が半減している現状、作物への移行も限定的なことも分かってきた。それなのに、いまだに机上での除染の効果や、一般論的な放射線防護についての見解を発するだけの専門家が多過ぎないか。これからの除染の必要性は何か、除染そのものが目的化してしまっていないか、自治体の主体性が欠如してはいないか、放射線のことを伝え切れていないのではないか……などなど。専門家と言われる方々は、こうしたことに踏み込み、いろいろな放射線との向き合い方があることを示すべきだと思う。そして、向き合うべきは放射線だけではなく、住民ともであることを知ってほしい。

思考停止!?

もちろん、自治意識を失っている我々自治体にも問題はあつた。このままでは、災害からの復興などに有効な手立ては打てない。国の金をあてにし、思考停止に陥っている。相変わらず、

国からいくら金を持ってくるか（除染は全額が国費）だけを考えているようでは、先が見えている。

メディアは、放射線と向き合うどころか、ポピュリズムに寄り添っている。専門家は、御用学者呼ばわりを恐れ、住民やメディアと向き合うことを躊躇している。放射線で汚染された地域には、住民が住んでいる。除染で放射線をゼロにはできない。放射線の正しい理解の普及こそが、遠いようだが住民の安心獲得への近道だと思う。

かく言う私も、放射線だけでなく、住民と向き合った夏の“あつさ”を忘れかけている。2年も経ったから？ いや、まだ2年しか経っていないのに……。放射線と向き合い続けることは簡単ではない。実は、放射線や住民と、向き合ってきたつもりだけだったのでは……。安易に流れやすい自分がある。この執筆を期に、もう一度“向き合う”ことを考えなければ……。[向き合うのはいつ?][今でしょう!]

(伊達市役所)